

研 修 報 告 書

調査・研究テーマ	さいたま市における外国につながる子どもの教育の現状とその教育をより豊かなものにするために
目 的	外国につながる子どもに向けた本市の教育体制の改善
内 容	<p>日時：2021年5月12日（水）13時～14時半 場所：さいたま市議会・第一委員会室 参加者：高柳 俊哉、添野ふみ子、佐伯加寿美、出雲 圭子、松本 翔 説明者：地球っ子グループ・あそび舎てんきりん 芳賀 洋子 氏 報告書作成者：高柳 俊哉</p> 
概 要	<p>さいたま市で日本語指導員の制度が発足する以前から子どもの日本語に関わり、現在も「地球っ子グループ・あそび舎てんきりん」の代表、芳賀洋子さんに、現在のさいたま市の外国につながる子どもの教育の現状とこれからの教育制度をどのようにしていったらよいか等のお話を伺った。</p> <p>日本語指導が必要な外国籍の子どもは全体の5割で、愛知県、神奈川県、東京都、静岡県、大阪府、三重県、埼玉県に集中している。その中で、外国人児童生徒等への教育のあり方について、現状を踏まえた施策の充実をはかる必要がある。すべての子どもたちが、本来持っている力を伸ばして日本で輝く多文化共生の社会を作って行かなくてはならない。そのために、さいたま市はこれからどんな教育体制を作って</p>

概要
成果

いくのか、どんな体制を目指したら良いのか。

現状としては、小中学校では、年間35週、一つの学校に一人の日本語指導員が行く派遣型になっている。課題としては、指導員の質のばらつき（指導員の時給も低い。）子どもの側からの要望は出せない、特に初期指導が問題、コーディネーターが必要なこと等である。

さいたま市は全国に先駆けて（当時は浦和市）日本語指導員の仕組みを作った。しかし、多くの自治体で取り組みが進み、国も本格的に外国の子供の教育を後押しするようになった今、さいたま市はその後の検証と改革が進まなかったためか、後れを取っている。

現在のさいたま市の制度を踏まえたうえで考えた一つの案を芳賀さんからいただいた。それは、今の制度を踏まえて、コーディネーターを適切に配置することである。予算上の問題は小さく実現可能だということである。現在の日本語指導員の中から、実力のある3人程度をコーディネーターとして登用し、コーディネーターとしての仕事を担ってもらうのはどうだろうか。まずは、現場で頑張っている日本語指導員の声を聞いて、課題を共有することが大切である。

子ども側から考えてみると、転入当初の空白期が、非常に大切である。横浜市や大阪市では、プレクラス型を取っていて、初期指導を集中的に行っている。この初期指導をコーディネーターを中心に行っていったらどうか。ほぼ日本語ゼロの子どもに合わせたサポートが必要で、子どもの状況に応じて対応していくことが、その子にとって、これからの日本での生活、友達関係にも大きく関わっていくのである。

これらの提案を踏まえて、さいたま市の「グローバル・スタディー」実施の中、さらなる発展のためにも、「多文化共生」、「異文化理解」、「多様性」、「SDGsだれ一人取り残さない」、「グローバル化」、「国際化」。これらを実現するためにも、すべての子どもたちのための教育環境を作っていけるよう取り組んでいきたい。学校現場だけでなく、教育委員会や国際交流センター、NPO、民間企業など地域ぐるみで柔軟に連携することが大切である。また、個人の習熟度に合わせたきめ細やかな支援や、児童生徒が自信を失わずに学習へのモチベーションを保てるような方法が求められている。彼らのアイデンティティを尊重した、多様性ある「学び」についても検討する必要があると思う。

基本政策	4.すべての子どもと若者に夢とチャンスを 5.社会全体で子育てを支えるまち 13.多様な個性・価値観と人権が尊重されるまち
------	---